

2010 年度 小委員会活動成果報告

(2011 年 1 月 31 日作成)

小委員会名	オープンビルディング小委員会	主 査 名：村上 心 就任年月：2010 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	建築計画本委員会(構法計画運営委員会)	委員長名：松村 秀一 主 査 名：南 一誠
設 置 期 間	2008 年 4 月 ～ 2012 年 3 月	
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<p>・膨大な既存建築物のストックを環境負荷の少ない方法で効果的に改修・転用していく技術体系の確立が求められており、オープンビルディングの計画手法はその実現に大いに役立つ可能性がある。</p> <p>・そこで本小委員会では、1 レベル概念を用いたストック活用技術の開発・実践、2 アーバンティッシュの概念整理とその更新手法の検討、3 ストックの高度活用を支える構法・産業・制度のあり方の検討に取り組む。</p> <p>・同時に、CIB W104(Open Building Implementation)の日本窓口として、オープンビルディングに関する研究・実績・教育の普及活動にも取り組む。</p>	
委員構成 (委員名(所属))	<p>委員公募の有無：無</p> <p>村上 心(岡山女学園大学)：主査・門脇 耕三(首都大学東京)：幹事・藤本 秀一(建築研究所)：幹事森田 芳朗(千葉大学)：幹事・安枝 英俊(京都大学)：幹事 鎌田 一夫(住まいの研究所)・小畑 晴治(日本開発構想研究所)・佐藤 考一(建築・環境ワークス)・澤田 誠二(明治大学)・曾根 陽子(日本大学)・近角 真一(集工舎建築都市デザイン研究所)・松村 秀一(東京大学)・南 一誠(芝浦工業大学)</p>	
設置 WG (WG 名：目的)	<p>1 SI 技術の開発・実践 WG:レベル概念を用いたストック活用技術の開発・実践を行う。</p> <p>2 アーバンティッシュの更新手法 WG:アーバンティッシュの概念整理とその更新手法の検討を行う。</p> <p>3 ストック時代の構法・産業・制度 WG:ストックの高度活用を支える構法・産業・制度のあり方の検討を行う。</p>	
2010 年度予算	190,000 円	ホームページ公開の有無：有 HP： http://news-sv.ajj.or.jp/academic/seika/09seika/index.htm

項 目	自 己 評 価
委員会開催数	2 回 (年度内計画を含む)
刊行物 (シンポジウム資料等は除く)	
講習会	
催し物 (シンポジウム・セミナー・研究会・見学会等)	
大会研究集会	
対外的意見表明・パブリックコメント等	

<p style="text-align: center;">目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)</p>	<p>1. 委員およびゲストスピーカー（国内外の実務者・研究者）による報告ならびに意見交換、CIB-W104 共催の国際会議に出席、国際的な視座に基づいて、研究の方向性を議論した。</p> <p>2. SI 技術の開発・実践 WG（主査：門脇耕三）：2010年度は、4回のWGを開催した。開催日時および参加人数は以下の通りである。4月1日：4名，4月22日：6名，6月29日：6名，7月20日：5名。WGでは、オープンビルディング理論におけるレベルアプローチを、既成市街地の住環境を維持する手法へと応用することを目指し、関連する技術および方法論の開発を行った。また、外部有識者を招き、その実践的展開に関する議論を行った。</p> <p>3. アーバンティッシュの更新手法 WG:アーバンティッシュの概念整理とその更新手法の検討に向けた議論が交わされた。</p> <p>4. ストック時代の構法・産業・制度 WG:ストックの高度活用を支える構法・産業・制度のあり方の検討に向けた議論が交わされた。</p>
<p>委員会活動の問題点・課題</p>	<p>1. WG 活動の成果が小委員会および学会全体へフィードバックされる仕組みが必要。</p> <p>2. 小委員会全体としての具体的活動目標の設定により、更なる活動の活性化が見込まれる。</p>

*小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。